

先人の知恵から

40

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

漸く「夕行」に突入。少しずつ、一歩ずつ進んでいこう。今回は以下の7つ。

- ・大器晩成たいきばんせい
- ・太鼓も撥の当たりようたいこ ばち
- ・泰山は土壤を譲らずたいざん とうじょう ゆず
- ・大山鳴動して鼠一匹たいざんめいどう ねずみ
- ・大事は必ず細より作るだいじ さいより あり
- ・大は小を兼ねる
- ・大勇は勇ならずだいゆう

＜大器晩成＞

偉大な人物は時間をかけて実力を養っていくから、大成するのに時間がかかるということ。鐘かねや鼎ていのような大きな器は、簡単には作り上げることができないという意から。 出典 老子

この諺は有名だが、今の時代、何もかもがスピーディーで、大成するまで待てない雰囲気強い。子どもたちは、何かを創意工夫するのにも、一つ一つのことを咀嚼するにも、時間をかける必要がある。サクサク仕事を片付けるだけではなく、じっくりと取り組むことで、学びも発想も豊かになる。そんな時間が、特に子ども時代は大事だろう。

他の子に比べて、何をするにも考え込んでしまうような子や、じっくり観察するような子に、保護者はイライラして、「さっさとしなさい！」などと怒鳴ったりしている。アリを追いかけて、アリの巣を見つけ、ずっと観察している子や、砂場で何度も何度も山を作り、トンネルを掘る子、たくさん失敗を繰り返して、どうすれば良いのかを学んで行く子など、中々見かけなくなった。保護者は失敗しないように助言し手を貸してしまう。更に子どもたちは与えられたゲームや

YouTube ばかりに時間を費やしている。それでは自ら学ぶ力は育たない。よく観察し、考えるような子どもには、特にゆったりとした時間を与えたほうが良い。何かにつけ急かしてばかりいる保護者に対し、この諺を伝えてゆっくり育てることの大切さを伝えている。

<太鼓も撥の当たりよう>

相手の反応は、こちらの出方次第で違ってくることのとえ。太鼓は、撥で大きくたたけば大きく響き、小さくたたけば小さく響くことから。撥＝太鼓などの楽器を打ち鳴らす棒。「桴」とも書く。

保護者からよく相談されるのは、「子どもが言うことを聞かない」ということである。保護者の思い通りにならないのが子どもである。2歳前後は自我が出てきて、イヤイヤ期なので、「いや！」ばかり言われる。思春期に入れば、またそこで反抗的になる。保護者は反抗的な我が子に対し、怒鳴ってみたりなだめてみたり、あれこれ苦戦を強いられる。そうやって保護者も子どもも成長していくのである。何でもかんでも保護者の言いなりになるような子はむしろ心配である。最近では反抗期がない子どもたちも増えた。反抗期真ただ中の子どもに対しての、「いうことを聞かない」という相談はむしろ嬉しい。保護者には「順調に育っている」ことを保証し、その上で、「反抗期には、大きな生簀に放った魚と思おう。大枠はあるが、その中である程度自由にさせてあげよう。失敗も自分の力になるからあえてさせよう。そして、上手くコントロールするには、この

諺のように、ここは撥を軽く当て、こっちは強く当てるなどの工夫をすることが必要」と伝えて、具体的な対応と一緒に考えるようにしている。

具体的な対応については、小さい子の場合、褒める、おだてるは大事だが、少し大きくなってきたら、褒めるより認めるほうが良い。叱り方にも気を付けないといけない。全否定にならず、行動のみを指摘し、修正していくことなどがそれである。

太鼓をうまく叩くように、子どもをうまくコントロールできるようになるには、試行錯誤が必要だろう。千里の道も一歩から。

<泰山は土壤を譲らず>

度量の広い大人物は、多くの人の意見に耳を傾けることによって、ますます見識を高めていくというたとえ。泰山が大きな山となったのは、どんな小さな石や土くれでも退けずに受け入れたからであるという意から。泰山＝中国山東省にある山。一般にただ大きい山の意味でも使われる。

出典 史記

最近では、ネット情報を検索して、多くの情報を取り入れる方が多い。子育てについての情報もほぼネット情報である。多くの人の意見に耳を傾けることは大事であるが、情報がありすぎるとかえって迷うこともあるだろう。

いろいろな意見を探し、聞こうとする人にはこの諺を使うことはない。むしろ、人の話を聴かない保護者に対して、この諺をあえて出す。勿論、「あなたは度量が小さいから言うのだけど」というような話ではない。

むしろ、「あなたのように度量の大きい人は、この諺みたいに、多くの人の意見を聞いてきたから大きいのでしょうか」と別に嫌味として言うわけではないが、わざと言うことがある。そして「これからも更に様々な意見を聞いて、取り入れ、もっと大きくなるのでしょうか。」と続けるのである。人は褒めないとこちらの話など受け入れてくれない。相手が思ってもいない褒められ方をするので、「え？」となる。そして大抵、この後何を言うのだろうと聞く姿勢になる。そういう姿勢になったらすかさず、「ほら、やっぱり人の話をよく聞く方ですよ」と続ける。人というのは面白い！もちろんすべてがこう上手くいくわけではないが、この諺をこんな風に使っているという一例である。

＜^{たいざんめいどう}大山鳴動して^{ねずみ}鼠一匹＞

大きい山が音を響かせ揺れ動くので、大噴火でも起こるのかと見守っていると、小さな鼠がたった一匹出てきたにすぎなかったという意から。「大山」は「泰山」とも書く。

物事というのは、大げさに受け取ろうとすればするほど、大げさになり、大したことはないと思えば思うほど大したことではなくなるものである。

子育てでもよくそういうことがある。不安の強い人は、ちょっと咳をただけでも、肺炎ではないか、悪い病気ではないかと大騒ぎして、病院に駆け込む。結果、病気ではなく、むせただけなどということもある。

対人援助の仕事をしていると、ケースについて、こうなったらどうしよう、ああなっ

たらどうしようとあれこれ心配し、前もって要保護児童対策地域協議会を開いた方が良いとなって、多くの関係機関を呼び、大騒ぎになる事が時々ある。しかし、結局懸念したような大事にはならないことも多々ある。物事の見極めは難しいが、大げさにする前に、良い情報や安心材料に目を向けることが大事だ。良い情報や安心材料を見ていくと、そこまで心配しなくても大丈夫だろうということが見えてくるだろう。不安になって大騒ぎしているような支援者には、「大山鳴動鼠一匹ということもあるから、もう一度ケースを見直してみよう」と伝えている。

英語では・・・

Much bruit little fruit. (騒ぎばかりが大きく、収穫はほとんどない)

＜^{だいじ}大事は必ず^{さい}細より^{おこ}作る＞

どんな重大なことも、最初のごく小さなことが原因で起こるものである。大事のきっかけは常に些細なことであるということ。

出典 老子

前述の諺とは対称的かもしれないが、子育てにおいても、対人援助においても、小さなサインを見逃さないことは大事である。子どもが急に問題児になる事はない。それまでには何かしらサインが出ている。その小さなサインを見逃さなければ大事にはならない。特にいじめ問題などは、小さなサインに気づかなければ下手をすると手遅れになる。日頃からよく観察していれば、子どもの小さな変化、サインに気づくだろう。

子育てにおいても、毎日の子どもの顔色

や表情、食欲などを見ていれば、「何か違う、おかしい」ということに気づきやすい。いじめ自殺という悲しい事態を見聞きするたびに、どうしてもっと早く気づいてあげられなかったのかと悔やまれる。

物事の小さなほころびも、放っておけば、大きくなっていずれは壊れるなど大事になってしまうだろう。気づいたらできるだけ早く、何らかの手当をすることが大事だ。

<大は小を兼ねる>

大きなものは小さいものの代わりになる。小さいものより大きいものの方が幅広く役に立つということ。「大は小をかな叶える」ともいう。

出典 春秋繁露

大雑把な筆者は常にこの感覚でいる。服でも入れ物でも、小さかったら入りきらなかったり、ちょっと体形が変わってもすぐに着られなくなったりする。やや大きめだと、多少体形がかわってもすぐに買い替えなくて済む。鞆もあまり小さければ物が入らないし、大きすぎても邪魔だが、やはり小さいよりは大きいほうが、入れる物が多い時に助かる。

子育て中の保護者が、子どもにちょっと大きめの服を買ってしまつてと嘆いていた時、この諺を使う。子どもは直ぐ大きくなるので、ちょっと大きめがちょうどよいと。ただし靴は余りぶかぶかだと脱げたり転んだりしやすいので、靴はできるだけ足の大きさに合わせようとは伝えている。

大きな器の中に入れていた金魚は大きく育つが、小さい器に入れておくとあまり大きく

ならない。人を育てるのも同じように考えられないだろうか？大きい、広い心で子どもを育てれば、子どもも大きく広く伸び伸びと育つだろうが、あれしちやだめ、これしちやだめ、そっちはダメなど、窮屈な狭い世界に閉じ込めていたら、子どもは大きく育たない。小は大を兼ねないのだ。

<大^{だいゆう}勇は勇ならず>

真の勇者は、やたらに威張ったり、人と争ったりしないから、ちょっと見ると勇気がないように見える。

出典 ^{りくとう}六韜

思春期の初めに、ちょっと突っ張りたくなる時期がある。そんな子どもにこの諺を使うことがある。「かっこいい」にあこがれる子どもたちは、最近ゲームにはまっているので、ゲームの登場人物などに感化されやすい様子が見られる。ゲームに登場するような「勇者」という言葉には結構反応がある。だからこそこの諺が使えるのだ。

この諺のように、ちょっと見勇気がないように見える人ほど、芯はしっかりしていると伝えると、クラスで目立っている子に苦手意識を持っている子が少し元気になる。

自分をはっきり出せない子たちも、こうした諺を聞くことで、昔から言われていることだからこそ、自分を認めなおすことが出来たりする。諺って面白い。

出典説明

老子・・・

春秋戦国時代の思想家。道家の祖。姓は李、名は耳、字は聃（一説には伯陽）。老子は尊称。周の図書室の書記官だったが、周末の乱世を逃れて西方の関所を通った時、役人に頼まれて『老子道德経（老子）』二巻を著したという。

史記・・・百三十巻

中国古代の史書。最初の正史。前漢の司馬遷の著。古代伝説上の帝王黄帝から五帝、夏、殷、周、秦の各王朝を経て前漢の武帝までの約二千数百年の歴史を総合的に記した通史。本紀（帝王の伝記）と列伝（臣下などの伝記）を主体とする本書の歴史記述は「紀伝体」と呼ばれ、以後の正史の規範となった。

春秋繁露・・・十七巻八十二篇

前漢の董仲舒の作とされる書物。「春秋公羊伝」の説に従いつつ、君主権の強化や革命説を重視し、また災異説・陰陽五行説についても述べている。

六韜・・・六巻

中国の兵法書。週の太公望の著と伝えられるが、現存するものは魏晉時代に成立したとみられる。文韜・武韜・竜韜・虎韜・豹韜・犬韜の六巻から成る。戦国時代から漢代の兵法を集成したもの。同じ兵法書の「三略」と合わせて「六韜三略」と称される。